

第三十三回「あかつき賞」受賞者名

学年	受賞者名	学校名	題名	指導教員
小学一年	村上 稜太 むらかみ りょうた	南郷小学校	学校にいきたいよ	松谷 恋
小学二年	大西 将仁 おおにし まさひと	南郷小学校	三年目の秋まつり	渡辺 素子 稲葉 光我
小学三年	田井地 焚美 たいち たきび	南郷小学校	ぼくとフツカ	橋詰 拓
小学四年	岡田 壮大 おかだ そうだい	上川口小学校	車いすラグビーの体けんで思ったこと	長井 亮磨
小学五年	植田 めい うえた めい	南郷小学校	ぶんたんのしゅうかくの手伝い 「ゆつくりでええけんね。」	青木 純子 曾根 純子 渡会 健太
小学六年	豊田 悠斗 とよだ ゆうと	拳ノ川小学校	陸上三冠王を目ざして	門田 博人
小学六年	山中 心優 やまなか みゆう	田ノ口小学校	『砂浜』のあしあとは夢へ続く	斉藤 文

学校にいきたいよ

南郷小学校 一年 村上 稜太

ぼくは、ある日ねつがきゆうに出ました。

コロナではなかったけど、おにいちやんがコロナにかかりました。ぼくは、ねつが三日くらいつづきました。しんどいときに、かぞくがたくさんたすけてくれました。おねえちゃんは、おにぎりをつくってくれました。しおがよきいていて、とてもおいしかったです。おとうさんおかあさんが、ぼくのおでこにおりをふくろに入れたものをおいてくれたり、おとうさんは、よるごはんをはやめにつくってくれたりしました。

すこし日がたつて、ねつが下がったので、リモートでじゅぎょうをすることになりました。ほんとうは、リモートじゃなくて学校にいきたかったけど、いけませんでした。でも、休んでなにもできないよりは、リモート



でじゅぎょうをうけられるほうがたのしかったです。リモートをつなぐとき、つなぎかたがわからなかったけど、おにいちやんがつなぎかたをおしえてくれて、とてもたすかりました。リモートでじゅぎょうを受けているときは、ともだちが、いろいろたすけてくれました。音がきこえなくなるときには、ゆいとくんが、「まる」か「ぼつ」で、ぼくにもわかりやすくなりてくれました。音が小さかったので、きこえるようにタブレットのちかくではなしてくれました。さんすうのじゅぎょうでいどうするときには、だれかがパソコンをはこんでくれたりもしました。休みじかんには、クラスのもだちや二ねん生が手をふるとふりかえしてくれたり、はなしかけたりくれました。ゆあくくんが、そとにもタブレットをつないだままつれていってかれて、サッカーのようすを見せてくれて、とてもうれしかったです。

いよいよ学校にいける日がきました。ぼくは、あさから学校にいけるのをたのしみにしていました。リモートで、じゅぎょうをしていたから、じ



ゆぎようでわからないところもふあんじゃなかったです。それに、ともだちのかおもタブレットから見れていたので、あまりきんちようしませんでした。いえを出ると、小川のはしのあたりに学校にいっしょにいくメンバーがあつまっていました。みんなが、

「ひさしぶり。」

と、いつてくれてうれしかったです。学校についてからも、

「だいじょうぶやった？」

と、クラスの人がこえをかけてくれて、うれしかったです。ひさしぶりの学校では、まえできていたウイルノートをかくのわすれてしまつて、こまりました。そのときに、みくちゃんが、

「ウイルノートもかかないかんで。」

と、やさしくおしえてくれました。そのおかげで、ぼくはかくのわすれずにすみました。

ぼくは、休んでいるあいだ、かぞくやリモートごしのともだちに、たく



さんたすけてもらいました。とくに、クラスのもだちにはかんしゃしています。ぼくも、リモートなどでともだちがこまっていたら、つぎは、たすけるがわになりたいです。

三年目の秋まつり

南郷小学校 二年 大西 将仁

「そろそろ、行こうか。」

と、お父さんの声で、今日も、子おどりのれん習に行きます。秋まつりにおどるため毎週火曜日と金曜日の夜七時から七時半までぶち上の集会所でれん習をします。教えてくれるのは、ぶち地区の区長さんを中心にした「太刀おどりほぞん会」の人達です。ぼくは、年長のころからおどっているけど、きよ年までは、小だいこだったのが、二年生になった今年は、うちわをもっておどります。うちわには、れん習用と本番用とがあつて、れん習用のうちわは、木でできているのでけっこうおもたいです。しかも、二十分い上おどるのでとても大へんです。三十分の間には、二、三回アドバイスと休けいがあります。アドバイスは、じっさいにうちわをもつて、



ほぞん会のゆずるさんが、
「こうやって、うごかしながらやったらええよ。」

と、分かりやすく教えてくれます。古くておもたいうちわをうごかしながらおどっていたら、うでもいたくてもう休みたいなと思います。でも、このれん習がおわったら、ごほうびにジュースがもらえるので、体力ギリギリまでがんばっています。

本番前の金曜日は、子おどりに出るみんなが集会所へ集まりました。「たちごしらえ」です。たちごしらえというのは、うちわのまわりについている色紙を新しいものにかえることです。色紙をはった後のうちわを見ると（いよいよ本番だな）という気もちになります。

いよいよ明日が本番という夜、

「まさひと、明日は本番だから早くねたや。」

と、お父さんが言ったので、ぼくは、いつもより早くふとんに入りました。でも、なかなかねむれません。ぼくは、明日の本番には、どのくらいの人



が見に来るかな、まちがえずにさい後までおどれるかなと考えていました。いよいよ、秋まつり本番の朝、ぼくは、きがえとけししようをしてもらったために「いこいの家」に行きました。きがえは、地区の人が、けしようは、毎年やってくれる人がいます。せんもんにやってくれる人は、まず、けしようがのるようにあぶらのようなものをぬります。その上に、はだの色より少し白いクリームをぬります。目や口には、たくさんの色をまぜた、けししようをハケでぬります。ときどきけししようのこなが目に入っていたときがあります。そして、さい後にはなの上に白い線を入れると、なぜか（よしやるぞ）と、気もちが引きしまります。

秋まつりの会場は、しせつの前の広場です。むらさき色ののぼりが立つて広場には、はっぴを着た大人が大ぜいいました。広場の中心には、おみこしも出ていました。

いよいよ本番です。おどる前に、お父さんとお母さんの方を見ました。お父さんは、ぼくたちの名前をよんでくれました。お母さんは少しはなれ



たところで見てくれていました。

おじさんたちが、一れつにならんで子おどりの歌がはじまりました。ぼくと、三人はその歌に合わせておどりがはじまります。ぼくは、むかい合わせでおどっている一年のさんたくんと目を合わせておどりはじめました。ふりはあまりむずかしくないけど、むかい合わせのさんたくんと入れかわっておどるところがあるのでまちがえないように気をつけながらおどりました。お父さんがほぞん会の人達といっしょに歌っている声もぼくの耳にとどきました。おじいちゃんもおばあちゃんも遠くから見てくださいました。お母さんは、ビデオカメラでさつえいしてくれました。半分くらいおどったとき、うちわを回す手がいたくなっただけど、がまんしておどりました。やっとおどりが終わったときは、ほっとしました。見ているみんなからはく手をもらいました。

子おどりはじめて今年で三年目です。子おどりをおどれるのは、三年生までなので来年がさい後です。だから来年も、もつとれん習をがんばっ



て、くいのないようにおどりたいです。そして、つぎの四年生では、たい
こをたたきたいです。

ぼくとフツカ

南郷小学校 三年 田井地 焚美

五月八日にニワトリのたまごをふ卵器という機械で温めました。最初は五個のたまごを温めると一匹生まれました。あとから六個のたまごをいれても一匹もかえりませんでした。

ニワトリを飼おうと思った理由は、たまごを買わなくてすむからとニワトリのことを知りたかったからです。はじめて生まれたときは、なんかかわいいと思いました。生まれる前にライトでたまごをてらすと血管が見えてすごかったです。生まれた一匹はオスでした。

ぼくはフツカという名前をつけました。フツカという名前をつけた理由はふかふかだからです。

生まれたときはぼくの手のひらにおさまるくらいでとても小さかったで



す。今ではぼくの頭より大きくて両手でガシツと持たないと落ちてしまうほど大きいです。小さいときは家の中で飼っていたけどお父さんの鼻をついて鼻血がでて外で飼うことになりました。小さいときはぼくのふとんでいっしょに寝ていました。ぼくのふとんからおとそうとしたらいやそうにしていました。フツカはふかふかだからあたたかいです。フツカは家の中でもフンをします。フンをしたときは小さい布で取っていました。お母さんの耳元でフンをしたこともありました。

フツカが小さいときに海につれていきました。カラスにさらわれそうになりました。今連れて行ったらカラスを食べるかもしれないです。おじいちゃんのとこにフツカをあずけたら鳥かごから脱走しました。でも戻ってきました。

フツカも大きくなりました。

前まではちゃんと「コケコッコ」とは言っていなかったけど今ではちゃんと「コケコッコ」と言っています。ぼくたちが植えたブロッコリー



はフツカがいっぱい食べているからぜんめつしそうです。でもお母さんは怒っていません。今も家の中に入ったらソファアに座ってお母さんの足の上にあります。あつたかいと言っていました。つついてきてもいいと言ったらやめてくれます。昔は畑でとった青虫やしるが出る葉をフツカに食べさせていましたが、今ではムカデが出てきたらフツカに食べさせています。どくがあるムカデを食べていてすごいと思いました。

フツカとの一番の思い出は、トサカがはえてきたことです。オスだからがっかりしたけどオスだから朝三時に「コケコッコー」と言います。早起きができるからよかったです。

フツカが一人だけなのはさみしそうなのでニワトリを増やしてあげたいです。ニワトリが生まれたらフツカがリーダーになってほしいです。

これからもフツカとの生活を楽しみたいです。

車いすラグビーの体けんで思ったこと

上川口小学校 三年 岡田 壮大

十二月に車いすラグビーの体けんがありました。高知県の車いすラグビーチームのフリーダムというチームから三人のせん手が来てくれました。車いすラグビーの車いすに乗ってみると、ぼくがさいしょに思ったよりも動きやすいということがわかりました。思っているよりジグザグに動けたり、すわるところもふわふわしていて、乗りごこちがよかったです。フリーダムのせん手の人たちは、指でにぎってボールをつかむことができな人もいたのに、タイヤを使って上手にボールを拾っているのがすごいなと思いました。自分の今できる力を使ってやっているとところがすごいと思いました。しょうがいを持っている人も強いタックルをしていました。とてもこわかったけど自分にできないことをやっていたせん手のみなさんが



すごいなと思いました。オフエンスデイフェンスがあつて、せん手の人たちはすごく速く動いていました。しょうがいがあつてもぼくらよりもすばやく動くことができていて、ぼくが思っていたよりもたくさんの方ができるんだなと思いました。

体けんが終わって、せん手の人のお話を聞いていると、じこにあつて、四十回くらいしゅじゅつをしていて、何回もつらい気持ちになつていたことや、お風呂や外食をする時に、ぼくたちがあたりまえにできることが大変だということがわかりました。外食する時に、かいだんだと行きたくても行くのをやめてしまう話を聞いていつもぼくたちが当たり前のようになできていることの大切さに気づくことができました。

この車いすラグビーで体けんや、せん手の人たちの話を聞いて思ったことは、自分たちが当たり前にできることでも助けがひつような時もあるけど、できることもたくさんあるのでどんなことがこまるのかを知ることが大事なんだなと思いました。もし、こまっている人がいたらやさしく声を



かけて、助けがひつようなら助けたいと思います。でも、ぜんぶやるんじゃないくて、できることは見守ることも大事なんだと思います。たとえば、かいだんとかでこまっていたら、後ろを持って少しおしてあげたりしたらいいと思いました。

これから、今よりももっといろいろな人にやさしくかかわっていききたいです。

ぶんたんのしゅうかくの手伝い

南郷小学校 四年 村上 颯平

ぼくは、加持の小川に住んでいます。ぼくの住んでいる所は、川も山もあつて自然が豊かな所です。ぼくの家はこの山で区長のゆうじさんがぶんたんを作っています。冬休みぼくが、庭であそんでいると、軽トラで区長のゆうじさんが通りかかりました。車のまどから顔を出して、

「今日、ぶんたんの手伝い来て。」

と言われました。ぼくは家にかえつて、お母さんに、

「ゆうじさんのぶんたんの手伝いに行つていい。」

と聞くと、お母さんは、

「いいよ。」

と言つたので、手伝いに行くことにしました。ぶんたんの手伝いは、初めから箱を用意します。なぜかというと、木からとつたぶんたんを入れる



ためです。から箱をぶんたんがいっぱいになっている木の下に九箱ずつ運びました。一箱にぶんたんは、二十個くらい入ります。から箱を初めはねこ車で運んでいたけど、ゆうじさんに、

「手で持っていった方が速い。」

と言われたので、ゆうじさんの孫のじゅんといっしょに、一人四箱ずつ持って運びました。運ぶのは、大変だったけど、いがいと速く運べました。

それが終わると、ゆうじさんが、

「次は下におちちゆう枝を拾って。」

と言いました。また、じゅんと二人でふくろの中におちている枝を拾いました。しゃべりながら拾っていると、ゆうじさんが、

「しゃべらんとやれ。」

と言いました。ぼくは、きびしいなあと思いました。しゃべれんから、じゅんとどっちがいっぱい枝をあつめられるか勝負しながらやりました。ぼくもじゅんも必しで枝を拾いました。ほとんど枝がなくなったので、どつ

ちが拾った枝が多いか見てみると、ぼくの方が多くて、うれしくなりました。

次は、ぶんたんの入った箱をとりやすいようにたてに三こ、よこに三こつむ作業です。ぶんたんの入った箱を持つてつみ上げるのは重くてできなかったから、近くまで弟のりようたにひこずってきてもらいました。りようたはひこずっているけど重そうでした。ひこずってきたのをじゅんとせえのと言いながらつみ上げました。二人でもち上げてもぶんたんの入った箱は重かったです。つみかさねるとき、ぶんたんがつぶされないように、気をつけながら、つみ上げました。上につんだ箱の下にぶんたんがあたりそうになったら、そのぶんたんだけ他の箱に入れました。最後に、しゅうかくしたぶんたんをひやさないようにわらをかける作業です。ぼくとじゅんは、わらを軽トラにのせて、ぶんたん畑の上にあるぶんたんをねかす場所、軽トラにのせてもらって行きました。そこでは、木と木のあいだから、山の下の家や遠くの田んぼも見えます。広い場所にぶんたんの箱より



もっと大きな箱が四列ありました。その中にはぶんたんがいっぱいです。こんなにしゅうかくしてすごいなあと思いました。ゆうじさんの話によるとぶんたんをひやすと、中の実がぱさぱさになってしまっておいしくなくなるようです。だから、ぶんたんをひやさないために、わらをかけなければいけないようです。ぼくは、軽トラにのせてあったわらを両手で持てるだけ持ってぶんたんの上にかぶせました。顔にわらがチクチクあたりました。わらをのせると、さらにその上からビニールシートをかぶせて、そのビニールシートがとばないように木を重りにして、置きました。全部の作業が終わってぶんたん畑にかえるとゆうじさんが、

「もう終わりです。みなさんありがとうございます。」

と言いました。ぼくは、すぐくつかれていたけど、ゆうじさんに

「ありがとう。」

と言ってもらったから、うれしかったです。ぼくは、半日だけ手伝ったけど、ゆうじさんやせつみさんは、これをいつもしているから（大じょうぶ



かなあ)と思いました。

ぼくは、ときどきぶんたんをゆうじさんからもらうことがあります。そのぶんたんは、あまくてすごくおいしいです。おいしいのも、ゆうじさんたちがいっしょうけんめい作ってくれたぶんたんなので、感謝して食べたいです。それにすごく大変だということが分かったから、来年も手伝いたいと思いました。

「ゆつくりでええけんね。」

南郷小学校 五年 植田 めい

この言葉を言ってもらったのは、私が重度のねんざをしていて、まっばづえ生活になった時です。

陸上記録会の練習で、ハードルを先生に教えてもらいながらこつをつかんでとんでいると、後ろの足がハードルにからまってこけてしまいました。ハードルをしていてこけていた人を見るのはよくあるけど、こけたしゅん間に、ハードルってこけたらこんなにいたいんだということを実感しました。

運動場から保健室に行く所まで、足が地面につくとすぐくいたいからどうしようと思ったけど、先生と一緒にハードル走の練習をしていた稀々ちやんと葵ちゃん、無事にだんさがある所も行けてよかったです。近くに



見守ってくれる友達がいたからとても安心しました。

他にも、授業が終わって外に出てきた低学年の人でも、私が足を冷やしているのに気づいたら、すぐに近くに来て、

「だいじょうぶ？」

と声をかけてくれたので、うれしかったです。

病院に行ってみてもらった時に、

「こっせつかもしれません。」

と言われた時は、（じゃあ陸上記録会出れないじゃん）と思って、すごくあせりました。でも、レントゲンをとったら、どこもこっせつをしていなかったのほっとしました。が、先生に、

「重度のねんざなので陸上記録会はちよつと・・・。二、三週間はかかるのでね。」

と言われて、気持ちはまたグンツと下がり最初と同じ気持ちになりました。後で、お父さんにも同じ事を言われました。



帰ってからお母さんには、

「ダンスの練習も今月はお休みだね。」

と言われました。すごく好きでやっていたダンスの練習も十月いっぱい行けないのも悲しかったし、くやしかったです。ダンスのある日は、いつも自分の部屋でまどを見ながら（いいなあみんなダンス行けて。私めっちゃ運悪いなあ）と思ったり、独り言として口に出してたりもしました。（なんか私、いけないことでもしました・・・？）と神様に聞きたいくらい、くやしかったです。

足がねんざになって、私だけ妹と同じバスに乗って下校するようになりました。私以外の子は、まだ小さい子ばかりで、とても気まずかったです、はずかしい思いもありました。となりにすわっていたのが妹だったのでまだましな方でしたが・・・。バスから降りる時は、一人でまつばえを持って、しかもランドセルと本ぶくろも持って降りたので、とても大変でした。特に、ランドセルが重くて、かるってしまうと後ろに倒れそうになっ



てびっくりしたし、片足でまつばづえを使ってはねる時はすごく足に力が
いりました。家の近くでバスから降ろしてもらったのに、ほんの少しのき
よりでも、家にたどりつくのにすごいつかれました。家についたら、足が
つかれて動きたくなかったので、げんかんでねころびました。ねようとし
たけど、妹のうるさい声でねられなかったので、けんけんをして、だんさ
がある所も手をつきながら乗りこえました。部屋の移動でさえすごくつか
れて、こけてしまった時には、思わずねんぎをしている方の足がついてし
まってすごく痛かったです。ハードルでこけた時のことを思い出すと、ハ
ードルをするのがだんだんこわくなって、ハードルがいやになってきまし
た。来年の陸上記録会は、ハードル走どうしようかなあとなやみ中です。
陸上記録会当日は、私は出場しないけど、みんなの応援として行きま
した。バスを降りるときは、虹心ちゃんが私についてくれました。
バスを降りて自分の場所に行く時は、他の学校の子達にすごく見られて少
し恥ずかしいと思ったけど、そばにいた五、六年生の女の子三人が、堂々



と私を見守ってくれたので、私も堂々と歩くことができました。

他の学校の知っている人に、

「どうしたが？」

と何度も聞かれて、私がどう伝えていいか分からなくなっていると、虹心ちゃんが代わりに事情を言ってくれて助かりました。トイレに行こうとする時も、葵ちゃんと虹心ちゃんがついてきてくれました。葵ちゃんと虹心ちゃんが、車の人に何かしらの合図をしながら、横断歩道を渡るのを手伝ってくれました。いすの場所を移動させる時も、私が立つてふらつきそうにならないように稀々ちゃん、葵ちゃん、虹心ちゃんが支えてくれました。私が寒くて上着を取ろうとした時も、気にかけて取ってくれたり、それを着ても寒いなあと思ったら、三人が競技をしている間、優しく上着をかしてくれました。まるで、葵ちゃんと虹心ちゃんと稀々ちゃんの三人が見守り隊の人に見えたりすることもありました。ふつうは、みんなの前でけがとかしてたら堂々とすわっていられないのに、稀々ちゃんと、葵ちゃん、



虹心ちゃんがいつでもそばにいてくれて、元気にみんなを応援することができました。次に、だれかがけがをしたら、三人みたいなりっぱなお助け隊になりたいです。陸上記録会に今年は出られなかったのですが、来年は自分が練習した成果を他の学校の人達の前ではつきしたいです。

陸上の後の月曜日、学校の階段を上がろうとした時、たまたま通りかかった稀々ちゃんと葵ちゃんが、

「おはよう。」

と言って、いっしょに階段を上がってくれました。私が少し後ろにたおれそうになってよろけた時も後ろにいた葵ちゃんが支えてくれたり、前にいた稀々ちゃんが支えてくれたりして安心しました。稀々ちゃんと葵ちゃんと虹心ちゃんと階段を上り下りする時は三人でやりやすい上り方と下り方を色々と考えてくれてうれしい気持ちと安心する気持ちでいっぱいでした。まっばづえ生活だと不安な事が多いと思っただけど、三人のおかげで毎日とても楽しかったです。



私がこのけがが一番大変だったことは、色々な所に移動することでした。でも、葵ちゃんと稀々ちゃん虹心ちゃんが荷物を運んでくれたり、一緒にいてくれたりしたのでとても安心して過ごことができました。これから私は、困っている人を見かけたら私を助けてくれた友達のことを思い出して、

「ゆっくりでええけんね。」
と優しく声をかけます。

陸上三冠王を目ざして

拳ノ川小学校 六年 豊田 悠斗

十月七日に陸上大会がある。ぼくが出る種目は五十メートル走と百メートル走とハードルだ。

まず、五十メートル走の練習だ。五十メートル走の練習は二人で走る練習だった。先生は最初のスタートが大事だと言った。そしてスタートラインに立った。先生のピストルの音より少しおそく出た。体全身に力が入ってしまふ。タイムは七秒四だった。自己ベストだ。

ある日五十メートル走のタイムを計ると七秒三が出た。ぼくはうれしくて、

「よっしゃー。」

七秒三は黒潮町の陸上大会の大会新記録だった。これは大会新記録を作



れると思った。先生がにこにこしながら、
「五人消そう。」

と、言った。ぼくは五人消して大会新記録を作ろうと思った。

次は百メートルの練習だ。百メートルはとうま君と走った。先生は最初のがんばり最後のがんばりだと言った。最後はこしがぬけるからがんばろうと思った。五十メートルは楽に走れるけど後半つかれてこしがぬけて走れない。タイムは十四秒六だ。連続して走ると息切れがすごくなって横腹がめっちゃいたくなる。百メートルはなかなか新記録が出ない。でも新記録が出るのもつとがんばろうという気持ちになった。

次にハードル練習だ。ハードルは去年も出たし感覚があった。でも一目二台目はうまく飛べないし高く飛んでしまう。練習で一回ゆうまと勝負した。ゆうまにはハードルもないし十メートルくらい先にいる。ぼくとゆうまがスタートする。当然ゆうまが勝った。ゆうまはめっちゃあおってきただ。ぼくは勝って当然やろと思った。三日たってハードルの練習をすると



飛べなくなっていた。飛ぶのがこわくなったのだ。何回やってもだめだった。先生は三日空いたら体がリズムを忘れると言った。でも練習するうちに自信がついてこわくなくなった。そして昼休みには校長先生がいつしよに練習してくれるようになった。校長先生も門田先生と同じようなことを言っていた。先生達のおかげでだんだん速くなっていった。

ついに陸上記録会本番の日が来た。

まず百メートルだ。ぼくより前で走っている人がぼくより速く走っているような気がした。そしてぼくらの番だ。スタートラインに並んだ。

「よいドン」

いい感じにスタートできた。練習では横に人がいなかったから、やばいやばい急げと思って走った。結果は十四秒ジャストで一位。これで一つ目だ。いけるぞと思った。

次はハードルだ。一回目練習があった。だれも横にいなかった。これいけると思った。ついに本番。一回目フライング、二回目フライング、三回



目ぼくは次ミスったらやばくねと思った。いつもよりしんちようにスタートした。ちよつと高く飛んだけど十秒三で一位だった。これで二つ目だ。最後に五十メートル走。きんちようしたまま列に並んだ。心臓がバクバク鳴っている。ついにぼくの番。大会新記録を作ると思っでスタートラインに立った。きんちようが高まった。

「よいドン」

スタートしたとき変な感じになった。全力で走ったけど伊与喜小に負けた。あーあ終わったなーと思った。結果を見るとぼくと伊与喜小の二人が一位で大会タイ記録だった。ぼくはテントの中で泣いた。矢野先生や友達にすごい三冠王でと言われた。友達や先生に言われれば言われるほどくやしくて涙が止まらなかった。でも大会タイ記録を出せてよかった。

この陸上大会への取り組みを通して、けい続することの大切さを学んだ。陸上の練習を一生けん命がんばってきたから三冠王になれたと思う。六年のうちにボール投げと千メートルも一位になろうとしている。五冠王にな



って小学校を卒業しようと思う。

『砂浜』のあしあとは夢へ続く

田ノ口小学校 六年 山中 心優

私の家は、甘いにおいがいつもしている素敵な家です。お母さんもお兄ちゃんもお菓子作りが大好きでとても上手。私もお母さんと一緒に作ったマリトツツオが成功して楽しかったことをきっかけに三年生の時からお菓子作りに夢中です。家族やいとこの誕生日、クリスマスなどは、お兄ちゃんとかーキを作ってみんなで食べます。おばあちゃんとおじいちゃんも「みうらが作ってくれたケーキが買うよりずっとおいしい。」

と言ってくれます。友達や先生にもお菓子を作って食べてもらいます。楽しくて、成功したらうれしいと思っていたケーキ作りが、みんなにいいと言ってもらえるうれしさにかわっていきました。さらに、ケーキ屋さんになりたいという思いが、「ケーキ屋さんになるぞ」と強くなったことが



ありました。

私は、総合学習で黒潮町の良いところ探しをした時、グリーンレモンも生産されていることを知りました。生産者の金子さんのお話を聞いて、金子さんの熱い思いと苦労を知って私たちの力でもっとたくさんの人とグリーンレモンの良さを楽しみたいと思って、「グリーンレモンPR大作戦」をすることになりました。

まずは、私たち自身がグリーンレモンの良さを知るために、みんなで料理を作り、どのチームが良いかバトルをすることになりました。バトルで勝ったチームは、その後のPR作戦を獲得できるのです。私のチームは三人でスイーツを作ろうと考えました。好きなお菓子作りで勝負をしようと思ったからです。私は、ワクワクしました。だけど、知らなかったグリーンレモンのスイーツのイメージがまったく湧きませんでした。そこで、コーチングしてもらおうことにして、「ケーキの職人山本」の山本さんに来てもらうことになりました。私は、すごく緊張しました。



とうとう明日は山本さんが来てくれるという夜に、グリーンレモンの皮をすって入れて、果汁もいっぱい入れたふわふわのパウンドケーキと、甘ずっぱく果汁をたっぷり入れたチーズケーキを作りました。これを、山本さんに試食してもらおうことを考えると、これで良いのか心配になりました。

次の日、山本さんを玄関でライ君と迎えました。

「こんにちは。」

とあいさつした時、服装も白いパティシエの制服をぱきつと着ていかっこいいと思いました。私の目は、キラキラしていたと思います。いよいよ試食してもらおう時が来ました。実際にお店を持っていて全国にもバスケットチーズケーキを有名にした職人さんに食べてもらうのは、とても緊張しました。山本さんは、いろんなことを考えているような顔で静かに食べていました。そして、

「本音でいってかまいませんか。」

と言いました。その後、



「どんな思いで作りましたか。これをどう広めたいですか。」
と聞かれたので、

「全国の人々に知ってもらいたいです。」
と言いました。そしたら、

「全国はダメ。家族や身の周りの人からじゃないといかん。」

と教えてくれました。確かに急に全国とか無理だなと思いましたが。今
思うと、家族や身近な人に知ってもらって喜んでもらうものは、他のみん
なに喜んでもらえるものだと思います。その後、山本さんは、パウンドケ
ーキでチーズケーキをサンドして見映えも良く見せてくれました。そして、
「塩をかけたらけっこういけます。他の人が考えないようなことをしてみ
て。」

とたくさんアドバイスをしてくれました。私は、山本さんのアドバイスを
ひとつも聞きのがさないつもりで一生懸命メモしました。塩をかけて食べ
たらすごくおいしかったです。次の試作の時は、山本さんの言う「他の人



が考えないようなものを作ろう」と張りきりました。

二回目の試作の時も、山本さんが来てくれました。それまでに一度カップケーキを作って先生にお店まで持って行ってもらい、試食をお願いしました。今回は、それをアレンジしてパウンドケーキ・チーズケーキ・生クリームの上層のカップケーキを作りました。山本さんには、

「いろんな味が楽しめるあきない物がいいね。」

「印象に残るようにしたらいいね。」

「もっと個性的に。パウンドケーキにグリーンレモンをまるごと入れてみたりしたら。」

とおどろくアイデアも教えてもらいました。そして、カップケーキの上にクジラをグリーンレモンの皮ですばやく形取りかわいらしく乗せてくれました。私たちは、いろいろな味が楽しめるもっと個性のあるあきない物を作ろうと、休日にもチームで集まっていろいろな案を出し合いながら試作をしました。学校でも時間をもらって作りました。何もしない休日は、



いてもたってもいられず一人でも試作しました。

何度も試作してやっと出来たのは、なんと六層のカップケーキ「砂浜」でした。山本さんがくれたアドバイスをもらったことで、どういう風にしたらグリーンレモンの良さを引き出せるか分かりました。緑をきれいに残すために、パウンドケーキの焼き時間を短くしました。そして、三回目の山本さんのコーチングの日、

「砂浜・・・、名前がいいね。」

と初めて喜んでもらいました。とてもうれしかったです。さらに、

「砂浜をイメージしたいなら、パウンドケーキをすってみたらいいんじゃない。」

とざるに入れたパウンドケーキをすって粉にしてカップケーキの上に砂のようにサラサラとかけました。次から次へ出てくる技にもおどろかされました。私は、全部その技をぬすむつもりでいました。

四回目最後の試作の日、山本さんとライ君がいつしよに作ったグリーン



レモンゼリーをブロック状にして四層目にのせて、トップをチョコをけずりとして流木にし、水色のチョコペンで波を表し、クジラと砂をかざり、『砂浜』の完成です。山本さんの、

「いいね、おいしい。あきないね。」

「黒潮町が出てていいね。」

の感想に、気持ちがうれしきさでいっぱいになって泣きそうになりました。がんばって良かったです。このカップケーキは、PR大作戦の日は時間が足りず失敗はしたけれど、「あつまれグリーンレモン料理」の時は大好評で、すごく喜んでもらえました。グリーンレモンPRがきっかけだったけれど、私にとっては絶好の夢への一歩でした。

この二カ月間は、夢中ですごしました。不思議と勉強もがんばれました。ケーキ屋さんになりたい気持ちは、大きくふくらんで作りたい物もイメージできた気がします。本物のパティシエ山本さんといっしょに作品づくりができたことが、お守りみたいで、ずっと支えになりそうです。一番初め



に山本さんの言った、
「家族や身の周りの人を笑顔に。」
そんなパティシエになりたいです。夢中で楽しんだし、これからも楽しみたいです。